

# 2 課

7月13日

## イエスの宣教活動の1日



安息日午後 7月6日

### 暗唱聖句

イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。(マルコ1:17、口語訳)

イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。(マルコ1:17、新共同訳)

### 今週の聖句

マルコ1:16～45、ヨハネ1:29～42、マルコ5:41、ルカ6:12、レビ記13章

### 今週のテーマ

四福音書は、イエスの宣教活動の始まりをそれぞれ特有の仕方で紹介しています。

マタイは、イエスが弟子たちを召し、山上の垂訓を説教される姿を描いています。

ルカは、安息日にナザレの会堂で行われたイエスの就任説教の物語を記しています。

ヨハネは、初期の弟子たちの召しと、イエスが最初にするしを行われたカナでの婚礼について詳しく語っています。

マルコによる福音書は、4人の弟子の召しについて述べ、カファルナウムでの安息日とその後の出来事について説明しています。

マルコによる福音書の冒頭における、この「イエスが共におられる安息日」は、イエスがどんなお方であるかを読者に教えています。今週の研究対象である箇所(マコ1:16～45)には、イエスの言葉がほとんど記録されていません。弟子になるようにとの短い召しの言葉、悪霊に対する命令の言葉、ほかの場所へ行こうという計画の言葉、(祭司に体を見せて清くなったことを証明してもらいなさいという指示とともに)重い皮膚病の人をいやされた際の言葉くらいです。行動、特に人々をいやすことが強調されているのです。福音書記者は、イエスの宣教活動のすばやい動きを説明するために、「すぐに」「たちまち」という言葉を好んで用いています。

**問1** マルコ1:16~20を読んでください。イエスが弟子として召された人々は、誰でしたか。彼らはどんな反応を示しましたか。

マルコ1章には、イエスの言葉があまり記録されていません。しかしマルコ1:17には、のちに「ペトロ」と呼ばれることになるシモンとその兄弟アンデレという2人の漁師に対するイエスの言葉が記されています。2人の男は、ガリラヤ湖の岸に立って網を打っていました。

舟やその他の釣り具についての言及はなく、そのことは、彼らが経済的に裕福でなかったことを示唆しているのかもしれませんが。マルコ1:19、20では、ヤコブとヨハネが父親や雇い人たちと一緒に舟の中にいますが、それは、彼らがペトロやアンデレよりも経済的に恵まれていたことを示唆していると考えられます。ルカは、ペトロが確かに舟を持っており、実際、ヤコブとヨハネがペトロとアンデレの仲間であったと述べています（ルカ5:1~11参照）。しかし、マルコによる福音書は、この二組の兄弟を対比しているのかもしれませんが。そうすることでイエスは、経済的に豊かでない人も、豊かな人も、弟子として召されることを説明しているのです。

これらの人々に対するイエスの召しは、単純かつ直接的で、預言的です。イエスは彼らに、「ついて来なさい」と呼びかけられました。つまり、弟子にならなさいというのです。もし彼らがこの召しに応じるならば、彼らを「人をとる漁師」にする役割は引き受けると、イエスは述べておられます。

**問2** なぜこの人たちは、すぐにすべてを捨ててイエスに従ったのでしょうか（マコ1:16~20）。考えてみてください。

ヨハネの福音書は、もっと詳しく描写しています（ヨハ1:29~42参照）。この兄弟たちはバプテスマのヨハネの弟子で、イエスが「世の罪を取り除く神の小羊」（同1:29）であるというヨハネの宣言を聞いたようです。彼らはイエスに会い、ヨルダン川の近くで一緒に時間を過ごしました。したがって、宣教活動へのイエスの召しを彼らが受け入れたのは、軽はずみや逃避ではありませんでした。考え抜いてのことでした。

マルコが詳細を記していないのは、イエスの力を強調するためだと思われます。イエスが呼ばれると、漁師たちは喜んで応え、彼らの人生は変わりました。

問3 マルコ1:21~28を読んでください。カファルナウムの会堂で、忘れがたいどんなことが起こりましたか。この記事から、どんな霊的真理を引き出すことができるでしょうか。

ほとんどのクリスチャンには、クリスチャンとしての歩みの中で忘れがたい瞬間があるものです。例えば、イエスに従う決心をした瞬間、バプテスマを受けた日、神の臨在を強く感じた説教などです。このような瞬間の中には、忘れがたいだけでなく、人生を変えるようなものもあるかもしれません。

マルコ1章に記されている安息日も、カファルナウムのある人たちにとって、そうだったのかもしれませんが。「人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである」(マコ1:22)。イエスが教えておられたとき、悪霊に取りつかれた男が、イエスの教えの力に影響されて叫びました。「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」(マコ1:24)。そしてイエスは、その悪霊を追い出されました。

悪霊が口にしたこれらの言葉の意味を考えてください。まず、悪霊はイエスを「神の聖者」と認識し、汚れたサタンの軍勢とは対照的に、イエスが神の聖なる使者であることを認めています。私たちは、礼拝の場に聖なるものや人を期待しますが、汚れたものは期待しません。したがって、この物語では、善の勢力と悪の勢力が著しい対照を成しています。ここに私たちは大争闘の現実を見ることができます。人々はまだイエスが何者であるかを知らないかもしれませんが、悪魔は確かに知っており、それを公に認めているのです。

次に、「この人から出て行け」という命令は理解できますが、なぜ「黙れ」と、主は命じられたのでしょうか。マルコによる福音書のここから、注目すべき主題があらわれます。それは、ご自分が何者であるかについて、沈黙を求めるイエスの呼びかけです。学者たちはこれを「メシアの秘密」と呼んでいます。

当時のメシアへの期待は政治的色合いが濃かったため、沈黙を求めるイエスの呼びかけは、理にかなっていませんでした。メシアになることは危険でした。しかし、沈黙を求める声には、イエスが何者であるかという紛れもない啓示も含まれていました。時間が経つにつれて明らかになるのは、イエスの正体を隠すことはできず、イエスが何者であるかという真実が福音のメッセージの中心になるということです。人々は、イエスが何者であるかを知るだけでなく、イエスの到来にいかにか自分は応答し、それが自分にとってどんな意味があるのかを決断する必要がありました。

問4 マルコ1:29~34を読んでください。イエスはペトロの家族をどのように助けられましたか。この記事から、どんな霊的な教訓を得ることができるでしょうか。

すばらしい会堂での礼拝のあと、イエスは小さな弟子の群れ（ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ）とともにペトロの家へ退き、安息日の残りの時間を楽しい食事と交わりで過ごそうとされたようです。

しかし、そこには心配な雰囲気が漂っていました。ペトロのしゅうとめが熱を出して寝ており、当時それは、良くなるか死ぬかのどちらかであったからです。彼らがイエスに病気のことを告げると、主はペトロのしゅうとめの手を取って起こされました。すると、彼女はすぐに彼らの必要を満たし始めました。イエスによって救われ、いやされた人は、その結果として、ほかの人たちに奉仕するという原則の、なんと力強い実例でしょう！

マルコによる福音書の全体を通じて、イエスは患者に触れていやされることが多いのですが（マコ1:41、5:41参照）、触れたことが記されていない場合もあります（同2:1~12、3:1~6、5:7~13）。

イエスはその日、宣教活動をまだ終えられていませんでした。日没後、多くの人がいやしを求めてペトロの家に来て来ました。その日、会堂で起こったことを見たり、聞いたりしたからでしょう。福音書の記者が、安息日が終わる時刻まで人々が待っていたことを読者に伝えていないという事実は、読者が安息日について知っていることを前提としていることを示しています。マルコのこの特徴は、彼の読者が安息日遵守者であることと一致しています。

マルコは、その夜、「町中の人々が、戸口に集まった」（マコ1:33）と述べています。それらの人を全員助けるには、しばらく時間がかかったでしょう。

「何時間にもわたって、人々は出たり入ったりした。……カファルナウムでこのような日が見られたことはかつてなかった。大気は勝利の声と救いの叫びに満たされた。救い主はご自分が引き起こされた歓喜をお喜びになった。イエスは、ご自分のところにやって来た人々の苦難をご覧になって、同情に心を動かされたが、彼らに健康と幸福を回復しておやりになる力があることを喜ばれた。

イエスは最後の病人が治るまで働きをやめられなかった。群衆が立ち去り、シモンの家が静けさに包まれたのは夜遅くになってからだった。長い騒ぎの1日が過ぎ去って、イエスは休まれた。しかし町がまだ眠りに包まれているころ、救い主は『朝はやく、夜の明けるよほど前に、……起きて寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた』（『希望への光』797ページ、『各時代の希望』第26章）。

問5 マルコ1:35~39を読んでください。イエスがここでなされたことから、どんな重要な教訓が得られるでしょうか。

イエスは日の出前に起き、祈るために人気のない静かな場所に出て行かれました。マルコ1:35は、イエスの行動の中心として祈りを強調しています。文中のほかの動詞（「起きて」「離れ(て)」「出て行き」）は、すべて動作が完結しています（ギリシア語のアオリスト時制）。しかし、「祈る」という動詞は未完了形であり、ここでは特に、進行中の過程をあらわすために用いられています。イエスは「祈っておられた」、「祈り続けておられた」のです。聖句はまた、イエスが出かけられたのがいかに早かったかを強調しており、それは、彼の独りの祈りの時間が長かったことを示唆しています。

四福音書を通じて、私たちは祈りの人としてのイエスに出会います（マタ14:23、マコ6:46、ヨハ17章参照）。これは、イエスの宣教活動の原動力を知るうえで、重要な秘密の一つのようです。

問6 ルカ6:12を読んでください。このことは、イエスの祈りの生活について、どんなことを教えていますか。

多くのクリスチャンは祈りの時間を決めています。このような習慣は良いものであり、正しいことですが、日課となって、ほとんど機械的になされる可能性もあります。決まり切った型から抜け出す一つの方法は、祈りの時間を時折変更したり、時にはいつもより長く祈ったりすることでしょう。大切なのは、決して変更できない、ある種の型に自分を閉じ込めないことです。

ペトロとその仲間、イエスの祈りの場所には同行しませんでした。たぶんその場所は知っていたのでしょう。なぜなら、彼らが主を見つけているからです。「みんなが捜しています」という彼らの言葉は、前日の刺激的な経験に続いて、イエスがさらに多くの人をいやし、もっと教えられることをそれとなく提案するものでした。しかし驚いたことに、イエスはそれに異議を唱え、ほかの場所へ行って、より広い範囲で奉仕するよう指摘されました。「イエスは言われた。『近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである』」（マコ1:38）。

問7 マルコ1:40~45を読んでください。この出来事は、イエスについて、また彼が社会から疎外された人々といかに関わられたかについて、私たちにどんなことを教えていますか。

この箇所や旧約聖書全体に登場する「重い皮膚病」は、ハンセン病として今日知られているものだけを指していたわけではありません。この用語は、「恐ろしい皮膚病」と訳すほうが適切で、ほかの皮膚病も含まれていました。重い皮膚病は、紀元前3世紀頃、古代近東に伝わった可能性があります（『アンカー聖書辞典』第4巻277~282ページ参照）。したがって、この箇所の重い皮膚病の患者がハンセン病を患っていた可能性は十分にありますが、正確にはわかりません。しかし、病状がひどかったことは確かでした。

重い皮膚病の患者は、イエスが自分を清めることができになると信じています。レビ記13章によれば、重い皮膚病の患者は儀礼的に汚れており、他人との接触を避けなければなりません（レビ13:45、46参照）。

しかし、イエスはその人に深く同情し、触れられたのです。「イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』と言われ(た)」(マルコ1:41)。この行為は、夕方までイエスを汚したはずであり、夕方になってからイエスは儀礼的に再び清くなるために沐浴もくよくされる必要がありました（レビ13~15章と比較）。しかしマルコは、病人に触れたイエスの行為がその人の重い皮膚病を清めたということを明確にしています。したがってイエスは、その人に触れたことによって汚れることはありませんでした。

イエスは、このような場合にモーセがレビ記14章で命じる、いけにえをささげるように指示して、その男を祭司のもとに遣わされました。マルコによる福音書全体を通じて、イエスはモーセの教えを擁護し、支持しておられます（マルコ7:10、10:3、4、12:26、29~31参照）。この見解は、マルコ7章、10章、12章で、モーセを通して与えられた教えの本来の意図を破壊している宗教指導者たちと、際立って対照的です。これらの詳細は、イエスがマルコ1:44で、何も話さないようにとこの男に命じられたことを説明しています。もし彼がイエスによっていやされたことを話せば、イエスに対して偏見を抱いている祭司の判断がゆがめられるかもしれません。

しかし、清められた重い皮膚病の元患者は、そのことを理解していないようです。彼はイエスの命令に従わず、この出来事を大いに言い広め、イエスが宣教活動のために公然と町に入ることをできなくさせてしまいました。

参考資料として、『各時代の希望』第26章「カペナウムで」を読んでください。

マルコ1章は、イエスをどのように描いているのでしょうか。イエスには弟子たちを召し出す権威があり、弟子たちはそれに応じています。イエスは聖く、サタンの支配下にある汚れた霊とは対照的です。善と悪の間で大争闘が繰り広げられており、イエスは悪霊よりも強い力を持っておられます。イエスは病人を憐れみ、誰も触れようとしない彼らに触れて助けられるのです。

「イエスは、会堂で、ご自分が建設するためにおいでになった王国について、またサタンのとりこを解放されるご自分の使命について語られた。イエスは鋭い恐怖の叫び声にさまたげられた。1人の狂暴な人が人々の中から飛び出してきた、『ああ、ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です』と大声で叫んだ（ルカ4：34）。

たちまち混乱と恐れが生じた。人々の注意はイエスからそれて、み言葉を聞かなかった。サタンが自分のとりこを会堂に入れた目的はここにあった。しかしイエスは悪鬼を戒めて、『黙れ、この人から出ていけ』と言われた。『すると悪霊は彼を人なかに投げ倒し、傷は負わずに、その人から出て行った』（ルカ4：35）。……

試みの荒野でサタンを征服されたお方はふたたび敵と顔を合わされた。悪鬼は自分のとりこに対する支配力を保つために全力を尽くした。……しかし、救い主は権威をもって語り、とりこを解放された」（『希望への光』794、795ページ、『各時代の希望』第26章）。

私たちの主は、あちこちを移動しながら、常に多くの人と触れ合い、多忙な宣教活動を続けられました。主は、宣教活動や人々に対して、冷静で落ち着いた取り組み方や接し方をいかに持続されたのでしょうか。それは間違いなく、日々の祈りによるものでした。

祈りと聖書研究の時間に関して、あなたにとって実行可能なスケジュールを考えてください。自分に合うスケジュールを見つけ、その時間を用いて、聖霊と神の言葉に導かれつつ、安らかな精神を育んでください。

### 話し合いのための質問

- ① 祈りに関する疑問と、クリスチャン生活において祈りがなぜ重要なのかについて、話し合ってください。祈りの目的や効果は何でしょうか。
- ② 私たちの信仰について、あまり多くを語らないほうがよい場合はありますか。どんな場合でしょうか。どんな場合では、話すことが賢明なのでしょうか。